

貴州に魅せられて

貴州民族大学外国語学院 準教授 李海



●貴州とは

貴州といっても、日本ではあまり知られていない。それも仕方のないことで、そもそも中国でさえあまり注目されていらない地域なのである。まして、海を隔てた日本ではなおさらそうであろう。例えば、四川料理の店は今や日本の随所で見受けられるようになったが、辛くて酸っぱい料理で知られる貴州料理の店は数年前、ようやく1店舗ができたにすぎない。

中国史においても貴州の存在感は薄い。貴州に関係のある四字熟語と云えば、「夜郎自大」、「黔驢技窮」（なけなしの技）の2つがあるが、いずれも肯定的な意味の語ではない。貴州につい

ては、「天に三日の晴れの日なし、地に三里の平地なし、民に三分の銀もなし」とよく言われるが、まさに言い得て妙であると思う。なお、日本にも多大な影響を与えた王陽明は、この貴州の省都である貴陽市の修文県に流され、そこで心学を打ち出した。だが、時代の流れは貴州に変化をもたらした。長らく貴州が発展から取り残されてきたことには、それなりの理由がある。

「豊かになりたければ、まず道を作れ」この中国の諺が、貴州の課題である。この発展の足かせが取り除かれたならば、発展の進捗は当然早まるであろう。貴州の発展を阻害してきた要因としては、このように交通事情が挙げられる。中国では唯一平野がない省であり、

山地が多いため交通は不便であった。政府も、交通事情の改善を最優先の取り組み課題とし、大量の資金を投入してきた。

貴州の空の玄関口である龍洞堡空港は、30以上の山を切り崩す大工事の末に完成した。今やこの空港は中国有数の大規模空港として、年間約2100万人が利用している。日本の関西国際空港との間に直行便があるが、現在はコロナで運休している。省都の貴陽市も中国西南部における交通の要となった。とはいえ、貴州人の性質はあまり変わっていない。交通の便の悪さという歴史的要因が、そこに住む人々の生活や気質にも影響を与えたのである。山地が多ければ大量生産は難しい。自給

自足の農業経済が成立したが、人々は狭い地域での、細々とした生活に満足してしまった。結果として沿海部の広東省や福建省の人々よりも、開拓精神に欠けるといわれるようになった。

●最先端を走る―気候をいかしたビッグデータ産業

近年ビッグデータ産業が貴州経済を牽引していることも注目し値する。ビッグデータ産業がなぜこの僻地に合うのかと疑問に思われるだろうが、実は冷涼な気候が同産業の発展に適していたのである。

そもそも工業蓄積が少ない貴州で、発展を重要課題とするならば、いかなる産業を選ぶべきか。製造業や重化学工業を選んだところで、それらに関する蓄積が進んでいる他地域に追い付くのは困難である。それならば、ということ、蓄積が少なくて済み、現地の気候にも適した情報通信産業、中でもビッグデータ産業に貴州の指導層は白羽の矢を立てたのである。

気候との相性の良さを具体的に述べ

るならば、ビッグデータ産業は大量のサーバーを必要とするが、それらは一定の温度下で管理される必要がある。だとするならば、冷涼な環境での運営が適しているのである。

中国の国土の大半は、夏になると酷暑に悩まされる。一方、貴州、中でも省都の貴陽周辺は夏でも涼しく、平均20度ほどである。30度を超える日は稀であるため、避暑地としても好まれている。

大量のサーバーは放熱が必要だが、山の多い貴州では、それらを山中に設置している。山を掘削し、設備を置けば、冷涼な環境下で安定管理が見込める。電気代の節約は中国の著名大企業ファーウェイだけで年間数百億円にも上るといわれているが、貴州のビッグデータ産業も費用があまりかからない。データセンターの温度を適切に管理できるため、IT設備のハードウェアの耐用年数が長くなり、サーバー事故も少ない。結果として、データセンターの運営費用を削減できるのである。

貴州は工業蓄積が少ないことはすでに述べたが、それゆえに自然環境は破壊さ

れなかった。このような背景もあり、貴州は工業発展と環境保護の両立を掲げている。山の多い貴州では森林被覆率も高く、2022年度のそれは62・12%である。この数値は日本全体の森林被覆率68・4%と比べても大差はない。加えて、貴州は空気も良く、PM2・5の数値も全国では低い方である。

2021年、貴州のビッグデータ産業は同省経済のうち34%を占めた。増加率は6年連続で中国の省・自治区域のうち首位を走っている。特に、2021年度におけるソフトウェアと情報サービス産業の営業収入は59・3%増加したが、全国平均の増加幅41・6%を大きく上回っている。

2015年4月のビッグデータ取引所の設立も中国国内初のことであった。2022年に貴陽で設立された同取引所には390社が集まり、関連製品は495個に上る。取引成立回数は108回、そして売上金額は1億6398万元（約32億円）であった（『貴陽日報』2022年11月9日）。

今後、2025年度には貴州省のビッ

ゲデータ産業の規模は3千億元(約5兆9142億円)に達する見込みである。世界トップ500社に含まれるアップルやIBMをはじめ、アリババ、 Tencent、ファーウェイ、京東など中国国内の著名企業も貴州に拠点を構えている。なお、貴州のビッグデータ産業関連企業の半数は貴陽に集まっており、5千を超える。これらの中には上記国内外の大企業傘下の中小企業も含まれる。また、貴陽で新たに設立された国家級開発区である貴安新区は、世界で最もビッグデータ産業が集積されている地域の1つなのである(『瀟湘晨报』2022年2月24日および『貴州日報』2022年4月22日より)。

● 伝統も守る―民族文化のモザイク

一方で、農村振興は中央政府が注力している分野である。貴州の農村振興には民族文化ならびに田園など景観の保護という2つの特徴がある。貴州には17の民族が代々居住しており、多様かつ豊かな文化が存在する。

貴州は、国内でミャオ族、トン族、

水族が最も多く住む地域でもある。例えば、バサ・ミャオ族の部落は中国で最も原始的な民族部落である。狩猟を生業とするため中国では唯一猟銃の所持が許されている地域でもあり、その物珍しさからか、国内外の観光客を惹きつけている。世界的に知られた旅行ガイドブック『ロンリープラネット』が発表した「Best in Travel 2020」によれば、2020年の訪問すべき世界十大観光名所のうち、中国では唯一貴州が第6位に入っている。

貴州料理は四川料理、広東料理のように知名度が高くはないが、酒と民族舞踊と合わせて楽しめるという特徴がある。酒では、白酒の中でも名高い茅台酒だけでなく、その他のブランド酒も枚挙に暇がない。茅台酒の産地では街中に居酒屋が軒を連ねており、お酒の香りが漂ってくると言っても過言ではない。色鮮やかな民族衣装をまとう少数民族の少女たちが、アルコール度数50度を超える蒸留酒を注いでくれる。アシ製の管楽器である蘆笙などの民族楽器が悠揚たる調べを奏でる中、勧められ

るとついつい杯を重ねてしまう。このような少数民族の文化も貴州の経済・社会における重要な要素の1つである。現代文明が発達するならば、その一方で失われたものへの懐古の情も募ってくるものである。貴州には豊かな少数民族の文化だけでなく、「老漢族」と呼ばれる漢族の居住地がある。貴陽に近く、かつアジア最大級の瀑布である黄果树が位置する安顺市の「天龍屯堡」がそれである。

1368年に朱元璋が明朝を樹立したが、前政権元朝の残余勢力が梁王を主として帰順を拒んでいた。1381年、朱元璋は梁王征討のため約30万の軍を送った。数か月にわたる激戦の後、梁王は自決し、残余勢力は鎮圧された。だが、元朝の遺臣と現地の支配者である「土司」が手を結び再度反乱を起こすおそれがあったため、朱元璋は「屯堡」と呼ばれる屯田兵を大規模に駐屯させたのである。

屯田兵たちは江蘇省、浙江省といった長江下流地域の出身者であり、貴州定住後600年の間、明朝の文化・伝

統を守り続けてきた。屯堡人の言葉は数百年の歳月を経ても、周囲の言葉と同化しておらず、古代中国語の音声研究にはうってつけの「生きた化石」とまでいわれている。服装に関しても、屯堡の女性は伝統を受け継いでいる。青色の裾の長い服、精緻な緑の飾りからは、長江下流地域の刺繍の真髄が見て取れるだろう。先端が尖った婦人靴にも刺繍が施されており、屯堡女性の優雅な暮らしが垣間見える。屯堡女性服も、これまた明朝期の漢族伝統衣装を研究するための「生きた化石」なのである。これらの他、屯堡の食料品、建築物、戯曲も歴史研究の対象となっている。

このように少数民族や漢族の過去の原因風景が多く残されている貴州の大地は、中国有数の観光地になりつつある。

●格差是正に向けての取り組み

貴州の発展においては、格差是正策も特筆される。中国では発展の均衡が取れておらず、沿海部と中西部には経済格差がある。この格差を解消するた

め、中国政府は是正策を実施している。

この是正策の中身は、中央政府からの指示に基づき、主として西部の人々に恩恵を与えるプロジェクトである。これは日本の雁行型経済発展論の援用とも解釈できる。つまり、日本の経済発展に伴い、アジアNIEsも発展し、その流れに中国も続いた。そして、中国国内では沿海部から始まり、その発展の波が内陸部や西部に及ぶというものである。そして中西部出身者は労働力として大いに期待されている。

数年前、北京の空港で日本の元政治家に再会したことがある。その人は、当時労働組合の理事長を務めており、中国から日本への研修生招致のため訪中したとのことであった。話によれば、近年では中国の沿海部と日本との経済格差は縮小しており、同地域出身の研修生受け入れは難しくなっているそうである。そこで、その人は代わりに内陸の甘肅省での研修生募集を推進していたのである。

そういえば、中国の駐日大使館が、日本の労働組合と協議のうえ、甘肅省

出身者に職業訓練を施し、日本へ研修生として派遣したというニュースも最近耳にした。このような中央政府主導の下での、内陸部・中西部から海外への出稼ぎ促進も、有益な選択肢といえよう。

中央政府だけでなく、発展している東部の省や市が、劣後している中西部の省を支援している。支援の中には人的交流も含まれるが、例えば浙江大学の副学長鄭強教授は、貴州大学の学長を4年間務め、同大学の発展を促進した。

このように人材こそ発展における最も重要な要因と言える。日本の京都大学で博士号を取得した鄭強教授は国際的な視野があり、沿海部で実施されている競争システムを西部の大学に導入した。これにより大学の科学研究が活性化し、その成果は地域に還元されている。また、例えば筆者が勤務する貴州民族大学は、貴州省でミャオ族・トン族が居住する黔東南ミャオ族トン族自治州の鎮遠県に対し支援を行っている。私が所属している外国語学院（日本の大学では学部に対応）の例を挙げると、年に教員を1名ずつ任期1年で、

鎮遠県の農村に派遣し、その村の党支部書記（公的機関の実質的な最高責任者）を務めている。鎮遠県には、河と山に挟まれた古い街並みで知られる鎮遠古鎮もある。同県農村の発展に資する方策を考えることが、党支部書記には求められているのである。

貴州の発展に日本の先例が参考になったこともある。例えば、故人となられたが、平松守彦元大分県知事が考案した一村一品運動は貴州の大地に着実に根を下ろしている。この運動に倣い、修文県のキウイ、都匀市の毛尖茶、威寧イ族回族ミャオ族自治県のハムなどが優良産品として、全国に知られるようになった。

●「ファーウェイ創業者の「衣錦還郷」

ファーウェイは中国を代表するIT企業の1つであり、皮肉なことに昨今のアメリカの制裁により世界的にも知られるようになった。このファーウェイの創業者である任正非総裁が貴州出身である。「衣錦還郷」は、「故郷へ錦を飾る」という意の四字熟語であるが、任総裁も

貴州の発展に貢献している。

2016年

11月に貴州を視察した際には、現地政府と協議し、国家レベルの開

発区である貴

安新区にファ

ーウェイ初のグローバル・クラウド・

データセンターを設立することとした。

同センターは2021年9月に竣工し、

稼働開始した。ファーウェイは201

9年、2020年にも貴州で相次いで

関連会社を設立している。

加えて、ファーウェイは貴州財経大

学、貴州理工学院といった現地の大学

とも協議し、双方は科学技術の共同開

発、ビッグデータの実験、スマート・

キャンパスや人材育成などで協力して

いるのである。

●貴州発展のカギは教育にあり

発展における最重要要素が人材であ



貴陽市貴安新区に位置するファーウェイ・グローバル・クラウド・データセンターの全景

ることはすでに述べたが、教育の質の低さは交通事情と相まって、長らく貴州発展の制約要因となってきた。

貴州の日本語教育を例に挙げると、初めて本格的に日本語教育が開始されたのは1979年に貴州大学においてであった。筆者の在籍校である貴州民族大学は、貴州大学に続いて貴

州で2番目に日本語教育を開始したが、これも2004年のことであり、日本語教育の歴史は長くない。

沿海部や、重慶・四川といった内陸部だが経済が発展した都市、さらには海外である日本と貴州との関係は、いづれも緊密ではない。必然的に、貴州に進出する日系企業も少なくなる。このような背景もあり、日本語を学ぶ学生たちは就職で頭を悩ませることになり、常に不安を抱えている。さて、いかにして学生たちのやる気を刺激するか。私が思っていたのが、貴州出身で日本に縁のある先賢、謝六逸の歩みを伝えることであった。

謝六逸は1898年に貴陽で生まれ、19歳のとき官費留学生試験に合格、早稲田大学に入学した。早稲田で法律・政治を学んだ後、自分の趣味であった日本文学に傾倒し、母国へ日本文学を体系的に紹介するようになった。日本で『日本文学史』などの著作を出版すると、中国帰国後には上海の復旦大学で新聞学部を創設したのである。

清朝末期からの激動の最中であって、学究の多くは「急功近利」、すなわちち目先の利益を追い求め、腰を据えて日本文学研究に取り組もうとしなかった。だが、謝六逸は日本人および日本社会を知る窓口として日本文学の研究に没頭したのである。

● 続け、若者たちよ

気候風土が異なれば人もまた異なる。山高く、森深い貴州は長らく流刑地であった。結果として経済や文化は発展せず、現地の人々の考えも遅れていた。ミャオ族と漢族が領土を巡って争い、敗れたミャオ族は密林の奥に逃げ、そこで暮らすという歴史もあった。

中国の省の中では唯一平野がないことは前述したが、約17万平方キロメートルの土地が約3千8百万の人口を養っている。近年の交通の発達により、この僻地に住む学生たちも頻繁に都市に出かけるようになった。彼らは、自らを育んだこの地に愛着を抱く一方、時には外部の空気に触れたくもなる。

私は、彼らが外界に飛び込んでいくことを望んでいいる。異なる文化に触れ、故郷とそれ以外の地域との違いを見聞してほしい。経験を積み、見識を高め、いずれは故郷の発展に貢献することを強く勧めるものである。純朴で善良な学生たちも、師の教えを真摯に受け止め、手探りではあるが外の世界に踏み出していつている。

日本文学史の授業でも、これら学生たちにいかにして日本文学、例えば俳句などを理解させるか試行錯誤している。具体的には、日中比較文学の手法を用いている。俳句、さらには和歌などの日本文学を取り上げ、それらと漢詩を比較するならば、漢詩の日本文学に対する影響がうかがえるのだ。

文学を味わうためには、生活や人生に対する想像力が欠かせない。学生たちの多くは、貴州を出たことがなく、大学生活以外の社会経験も乏しい。であるならば、自国文学を理解することも容易でなく、まして異邦のそれであれば、いっそう困難であろう。

文学、中でも俳句、和歌、詩に対する理解も容易ではないが、それらは人間の歩みや、それに対する思いを感情的に表現している。国が異なっても、人はみな喜怒哀楽を持っている。日本人の多くが漢詩を愛好しているように、中国人が日本の詩や俳句など文学を嗜むこともできるはずである。

そう考えた私は、例えば日本の俳句に対し私なりの解釈を加えて、学生に紹介することにした。文学を通じて日本を理解しようとするならば、日本人の感情表現の在り方や、いかなることか日本人の心の琴線に触れるのか、これらを知るべきであろう。

ここで、日本文学史の授業で、謝六逸訳の芭蕉の俳句を学生と一緒に鑑賞した場面を紹介したい。

「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」

この句は芭蕉が、亡くなる4日前に詠んだ代表的な作品である。病身の芭蕉は、生気のない枯れた原野を走るといふ夢を見たのであった。芭蕉は、旅の途中であったが、大阪で病に臥してしまった。だが、漂泊を好んだ芭蕉は、夢の中でさえ旅するのであった。だが、このとき芭蕉は当時の江戸時代では平均寿命に達していた。彼自身も、この寂しい夢が人生の終焉を暗示していると感じたかもしれない。

私は、この句が訳者の謝六逸の心にも大きく響いたと予想している。彼の人生は順風満帆とはいかなかった。日中戦争の勃発後、戦乱の上海を避け、妻子を連れて貴州に戻ったが、社会の混乱はこの地に及んでいた。物価の高騰はひどく、謝六逸は大夏大学、貴州大学、貴陽師院の各校で教壇に立ち、さらには文通書局の編集者も務めた。それにもかかわらず、暮らしぶりは糊口をしのぐ程度であった。

さらに、悲しいかな、かつて上海の文壇で脚光を浴びていた謝六逸にとっ

て貴陽の文化・教育水準は満足のものではなかった。活躍の舞台がなく、心通わせることのできる親友もいなかった。戦争という国難の中で孤独、苦悩に苛まれ、貧困にあえいでいた彼は、ついに病に命を奪われた。1945年、47歳という若さであった。

謝六逸の人生と、松尾芭蕉のそれとを比べると前者の方が薄幸だろう。だが、病のせいで、やりたいことができなくなったという点では相通じるものがある。訳者の作者への思いを推測することの重要性を学生に伝え、理解の助けになればというのが私の狙いであった。

芭蕉の他の句も授業で紹介している。「枯れ朶に鳥のとまりけり秋の暮」

この句に出てくる枯枝、カラス、暮秋からは、寂しげな荒涼とした景色が思い浮かぶ。中国でも元朝初期に馬致遠という劇作家が、枯れた藤、古木、カラスを用いて、この句と似たような哀愁を醸し出す詩を書いている。もちろん、馬致遠の詩に比べて芭蕉の俳句は短い。それでも、読み手が双方を深く味わうならば「人生に孤独という帳

が下りてきた」、こんな感傷を抱くのではなからうか。

3つめに、春の生気に作者の哀愁を投影した句を挙げたい。

「行く春や鳥啼き魚の目は涙」

春は万物が蠢動し、希望に満ちた時期である。だが、そのときはいずれ過ぎ去るものであり、漲った生命も萎んでいく、そんな対比を短い句に込めたのであろうか。

この句を詠んだ当時、芭蕉は45歳であった。この頃に、千住から東北に向けて奥州街道を歩んでいく2400キロの旅を始めたのであった。見送りに来た友人との別離を惜しんだ。

一方、中国では杜甫の春望詩に「時に感じては花にも涙をそそぎ、別れを恨んで鳥にも心を驚かす」というくだりがある。安祿山の乱で長安が灰燼に帰し、亡国の悲しみを抱えた杜甫には、鳥のさえざりさえも、悲鳴に聞こえてしまう。花も本来ならば、その美しさに心癒やされるものだが、今は涙が零れてきてしまう。花や鳥といった美や飛躍を感じさせるものに悲しみを込め

た点に、この漢詩の素晴らしさがある。芭蕉の句に戻ると、魚は水中を泳いでいるのだから、涙を流しているかどうかなど分かるわけではない。だが、友との別れを、春の過ぎ去りと重ね合わせたのか。芭蕉は己の哀惜を花や魚といった自然に投影し、句を詠んだのである。謝六逸も芭蕉の句に大いに感銘を受け、中国で紹介したことだろう。

最後に、明るい雰囲気のことを紹介したい。

「花の雲鐘は上野か浅草か」

この句を詠んだ当時、芭蕉は江戸の深川に住んでいたが、その頃は視界を遮るような高層の建物はなかった。遙か彼方に緋色の雲のように桜が咲いている。また鐘の音は、その頃日々の時間を知らせる時報のようなものであり、現代のように大晦日にだけ鳴るものではなかった。

深川は上野からも、浅草からも3里（約12キロ）しか離れていないが、上野の寛永寺か、あるいは浅草寺からの鐘の音か。はたまた、2か所の寺の鐘が共に鳴っているのであろう。鐘の音

がゆったりと響きわたる様が想像され、安らぎの境地が感じられる。

謝六逸が生きた時代は、戦乱が絶えず、政情も混沌としていた。渦に巻き込まれるように生きてきた彼は、この句から連想されるような、泰平の世を待望していたのではないか。

●日本語で味わう貴州の少数民族文化

貴州は雨が多く、草木は青々としており、空気も新鮮である。特に貴州民族大学が位置する花溪区は、その名の通り、美しい川が流れ、春には桃とスモモが花開く。

地域は市民の憩いの場ともなっている。大学は高台に位置しているの、清らかな川や、帽子が並んだような幻想的な山並みを眺めることができる。静かで

心安らぐ、勉学にもうってつけの場であるとさえ言えよう。

また、大学周辺にはプイ族の村が点在しており、民族衣装を着た老婦人の姿を見かけることがある。このプイ族文化への敬意を込め、大学の本部ビルの色は水色になったそうである。また、同建物建設の際にはその3分の2が円借款により賄われており、日本との縁が感じられる。

このビルは、4本の大きな柱で支えられているが、それぞれ異なる4つの少数民族の文字が彫られている。代々貴州に暮らしてきたこれら少数民族の歩みを記念したものである。

多彩な少数民族文化は魅力に満ちている。貴州民族大学の日本語教育課程には、実は少数民族文化を学ぶ授業がある。この授業を通じて、学生は、貴州の少数民族文化が日本語でいかに紹介されているか、知ることができる。



貴州民族大学の本部ビルから雨に煙る花々や連山を眺める

百年前に著された日本を代表する人類学者鳥居龍蔵博士の貴州民族誌や、近年における慶應義塾大学の鈴木正崇教授の『ミャオ族の歴史と文化の動態——中国南部山地民の想像力の変容』も、貴州を紹介する大変良い資料であり、授業で学生と共に学んだ。

鈴木先生は上記著作でミャオ族の原風景を以下のように紹介している。

「夕暮れ時には沢山の人が伐採や耕作を終えて山からおりてくる。背後の山から子供たちが放牧していた水牛を連れ帰る。稲藁を背負って下ってくる子供、薪や飼料の草を天秤で担いだ女性たちが降りてくる。

夕方は、女性が再び井戸へ水汲みにいき炊事する時間でもある。夕餉の煙が各家の屋根から湯気のように立ち上がる頃に、濃い闇が迫って来る。夜がふける前に女性たちは再度、井戸に水汲みに行く。

月光の下、シャンシャンと銀の飾りの音をさせながら田圃のあぜを歩く女性たち、その背後に点々と明かりがつく村々がぼんやりと広がり、どこから

ともなく蘆笙の音声が響いてくる」。

また、ミャオ族の恋愛物語についての描写も心ときめかせるものである。

「女の子は身につけていた青い布を贈ると同時に男性の親指の爪の付け根に、自分の爪をたてて血が出るまで強く押しつけて傷つけたという。これは痛みを託して、心も痛むように、そして一生忘れられないようにするための印である（時には歯でかんだりすることもあるという）。

2人は涙を流して別れを惜しんだ。足に結ぶ青い布を、結婚する前の女の子からもらうのはたいへんに難しいとされているという。特に、体の下に身につけるものを与える場合は、特別の気持ちで籠められるとされる」。(同上 258〜259頁)

とはいえ、鈴木先生の取材も20〜30年前のことである。授業中、ミャオ族の学生さんに「このような経験をしたり、あるいは言い伝えを聞いたりしたことがあるかい」と尋ねたが、「一度もないですよ」という期待外れな返事が返ってきた。商品経済の浸透が、ミャオ族の

若者の恋愛文化を変えてしまったのかもしれないと、少しがっかりした。

私は、かくも民族の風情が濃厚な貴州で、日本語教育に従事している。コロナ禍の早期収束が望まれる。貴州の友人に訪日を勧め、日本の風情を味わってほしい。日本の友人には、貴州に足を運び、山水を満喫し、多彩な民族文化に触れてほしい。そんな日々が一日も早く来ることを、願ってやまない。(2022年12月22日、公開オンライン講演会)

筆者略歴(リ カイ)

1982年中国四川省生まれ。2001年10月に日本に留学し、2014年名古屋大学から文学博士号を授与。香港メディアの東京支局長を経て、2019年9月中国に帰国し、貴州民族大学外国語学院(日本語)に勤務。アジアユーラシア総研運営委員、全日本中国人博士協会常務副会長。著書に『日本上「命期」の梁啓超』、訳書に『王蒙先生論語を語る』『中国外交論』などがある。